



日本社会福祉学会第69回秋季大会開催のご案内

実行委員長 都築 光一（東北福祉大学）



新型コロナウイルスの影響により、異例ではありましたが1年遅れて、第69回秋季大会の開催校として20年ぶりに東北福祉大学が担当することとなりました。また初めてのことでありますが、WEBにより大会を開催いたします。大会校としても初めてのことでありますが、多くの皆様方からのご指導ご助言を賜りながら、成功させていきたいと思っております。

今大会のテーマは、「死から生を見つめる福祉」といたしました。少子高齢社会を迎えたこんにち、人の死は極めて身近なものとなってきています。社会福祉の各現場の中でも高齢者福祉の現場では、死に直面している方々に寄り添うという場面が日常化してきている状況が、現場の施設職員等福祉関係者からしばしば報告がなされてきております。

一方、地方の集落や東日本大震災でしばしば見受けられた事例として、既に亡くなった方であっても、地域の人々とよく交流のあった人は、人々が集まりを持ったときに話題に上り、その存在が蘇っております。これに対して繋がりがない人は、確かに今現に地域で生活する人ではあっても、地域の人々にとっては存在しない人であると言う事実があります。この場合の「死」の認識は、人の存在の有無そのものと、それを事実として認識する本人以外の人々の存在があって、初めて社会的に「死」が成立するという事実です。社会福祉学としてこれをいかに認識していくのか、基調講演では、様々な観点から多くの示唆を得たいと思います。

このように「死」について見てみますと、「死」は社会的な事象であると言えます。人間は社会的な存在である以上、「死」も社会的な事象であると捉える必要があります。人の「生」が価値あるものである以上、「死」をどう捉え、認識し、福祉の立場で説明した上でどのような実践を展開するのか、そうした議論を経て社会福祉の方向性を持つ必要があると思われます。社会福祉の対象者は、社会的に弱い立場に置かれており、その場合の人の「死」を捉える際には、「尊厳ある死」に相応しい「死」を迎えることができたかどうかも含めて、多角的に議論される必要があると思われます。シンポジウムにおいては、各シンポジストのそれぞれの立場からご発題いただき、議論を深めたいと思います。

大会では、初日の午前中に研究者として研究テーマをいかに深めていくか「研究テーマの育て方について考える」をテーマに、スタートアップ・シンポジウムをオンデマンドにて実施します。二日目は、午前中に「コロナ禍における国際社会福祉研究・教育活動」をテーマに、留学生と国際比較研究のためのワークショップと併せて、二つの特定課題セッションを開催します。午後からは、学会の初の試みとして「社会福祉学における研究方法論を考える～量的研究と質的研究の背景にある考え方を探る～」をテーマに、会員の研究力を高めることを目的として開催するものです。このほか、例年の研究発表として、口頭発表及びポスター発表が予定されております。

研究報告数は、例年に比較して相当に少なくなっており、コロナ禍によって思うように研究活動ができなかった研究者の方々も多かったものと推察されます。それだけにおひとりお一人に報告をしっかりと発表していただき、大会を有意義なものとしていけるようにしたいと考えております。

皆様を仙台でお迎えすることは叶いませんでしたが、初のWEB大会において有意義な議論を行い、皆様方と共に充実した大会にできるよう、関係スタッフ一同取り組ませていただきます。多くの皆様の参加を心待ちにしております。